

「オシロイバナの探究 (1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

5 年生理科の「植物の成長」の単元では、花の構造・おしべやめしべ、それに花粉の役割などについて学ぶ。通常は「アサガオ」を使うし、教科書でもアサガオを扱っているものが多い。確かにアサガオは非常に身近な園芸植物で栽培も容易、また花も大きいので、扱いやすい植物である。

アサガオの教材としての難点は、花の数に限りがあるので、一人の子ども(研究者)が、好きなだけ花を分解できないという点だろう。特に、つぼみ・開花した花・しぼんだ花・結実初期・若い果実・熟した果実・・・という成長過程の観察となると、相当な花の数が必要になる。



そこで私は毎年(5年理科を担当すると)「オシロイバナ」を教材として活用することになっている。幸い学校の花壇の脇に、半ば野生化したオシロイバナの大群落があり、毎年夏から初秋にかけて、長い期間花や実をつけている。

オシロイバナの「致命的な」欠点は、授業時間帯に「花が咲いていない」ことだ。これはオシロイバナの花が主に夜間に咲く為である。朝の会の時間帯や1時間目あたりだと、少しは咲き残っていることもあるが、基本的には「つぼみ」と「しぼんだ花弁を持った花」それに「果実」の観察になる。



これが「有難い教材」のオシロイバナの「大群落」である。誰が植えたわけでもなく、毎年種子が落ちて、同じ場所に一塊の群落を形成する。



5年生の子どもたちは、各自はさみを持参し、観察に必要な花やつぼみ、それに果実を「収穫」する。ざっと500以上は花をつけているので、学年全員で使っても材料不足の心配はない。



今の時期、まだ種子は小さく熟していない。花は昨夜咲いて今朝しぼんだもので、まだ新鮮なので十分に観察や実験に使える。